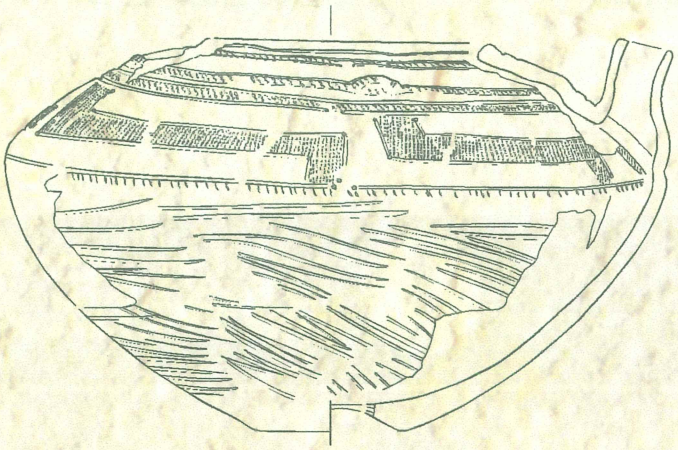
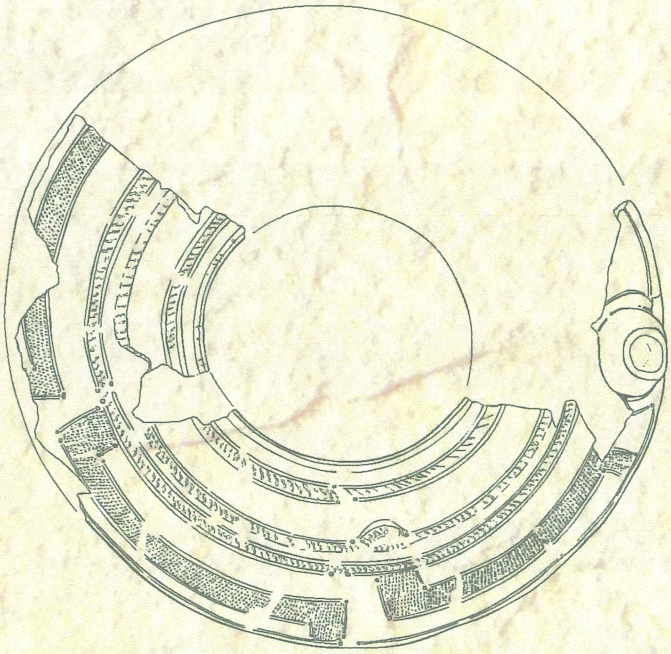
国史跡井野長割遺跡　指定15周年記念講演会

注口土器が語る
井野長割遺跡の交流





2021年1月16日（土）

佐倉市立中央公民館

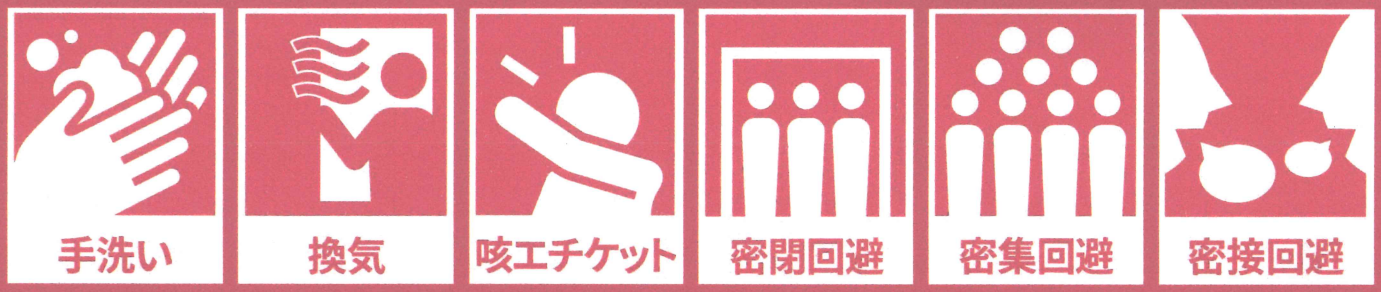
主催：佐倉市教育委員会

文化庁補助事業「地域の特色のある埋蔵文化財活用事業」

タイムテーブル

12：30～	開場
13：00～13：05	開会のごあいさつ 宍戸　信（佐倉市教育委員会文化課　課長）
13：05～13：35	講演１：「注口土器の発見の経緯と類例について」 小倉　和重（印旛郡市文化財センター調査係長）
13：40～14：10	講演２：「製作復元により受けとめられた 注口土器の造形と使用想定」 戸村正己（千葉市埋蔵文化財調査センター　縄文土器製作技術研究）
14：10～14：30	ー　休　憩　ー
14：30～15：30	講演３：「注口土器が動く理由（わけ）」 秋田かな子（東海大学文学部歴史学科考古学専攻准教授）
15：30～	閉会のごあいさつ

！感染症対策へのご協力をお願いします



!!感染が判明した場合

万が一、本日から３週間以内にPCR検査などで新型コロナウイルス（COVID-19）への感染が確認された場合は、濃厚接触者把握のため、速やかに佐倉市教育委員会文化課までご連絡ください。

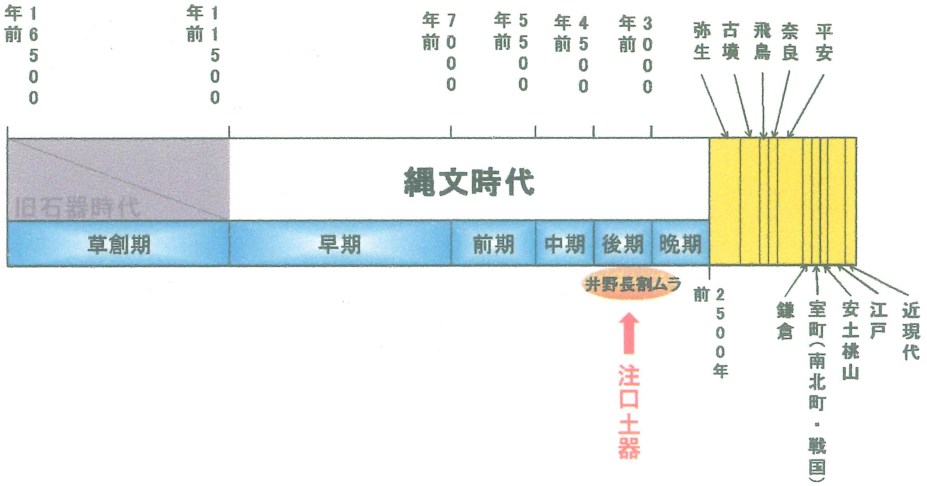
佐倉市教育委員会文化課：043 - 484 - 6192

令和３年１月16日

瀬戸内海

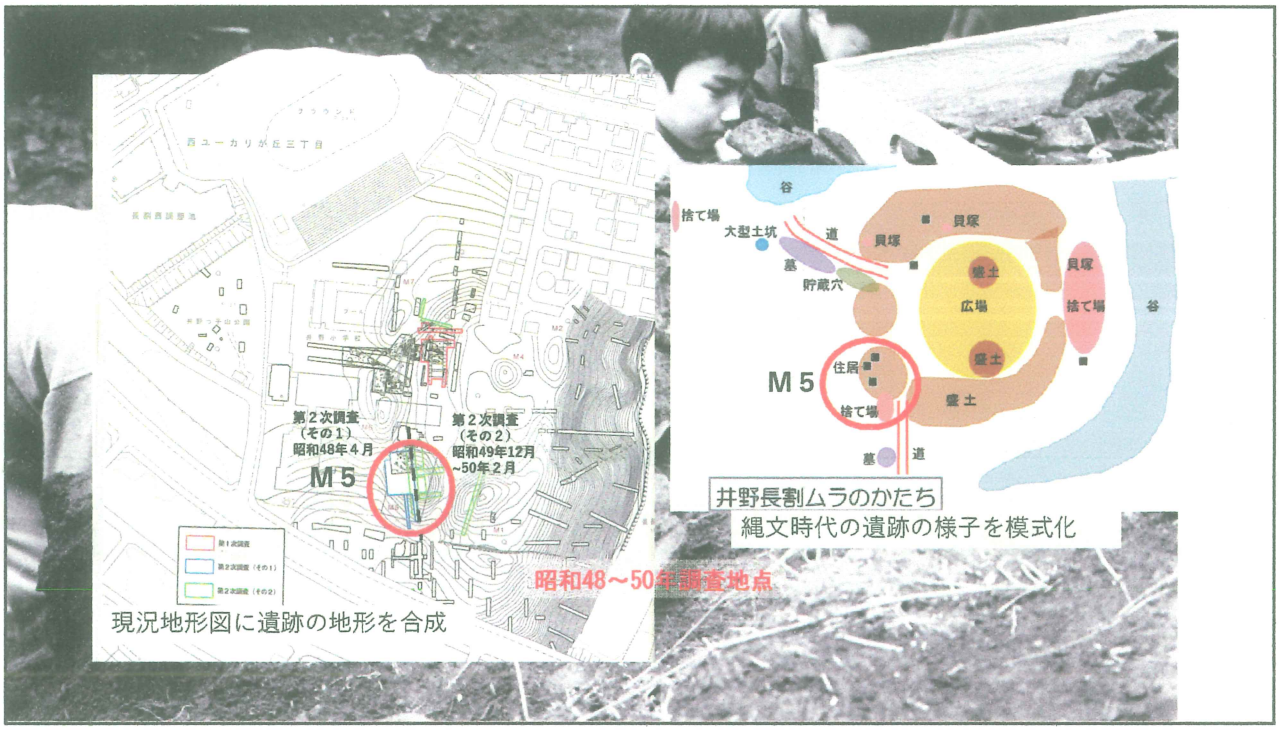
井野長割ムラ

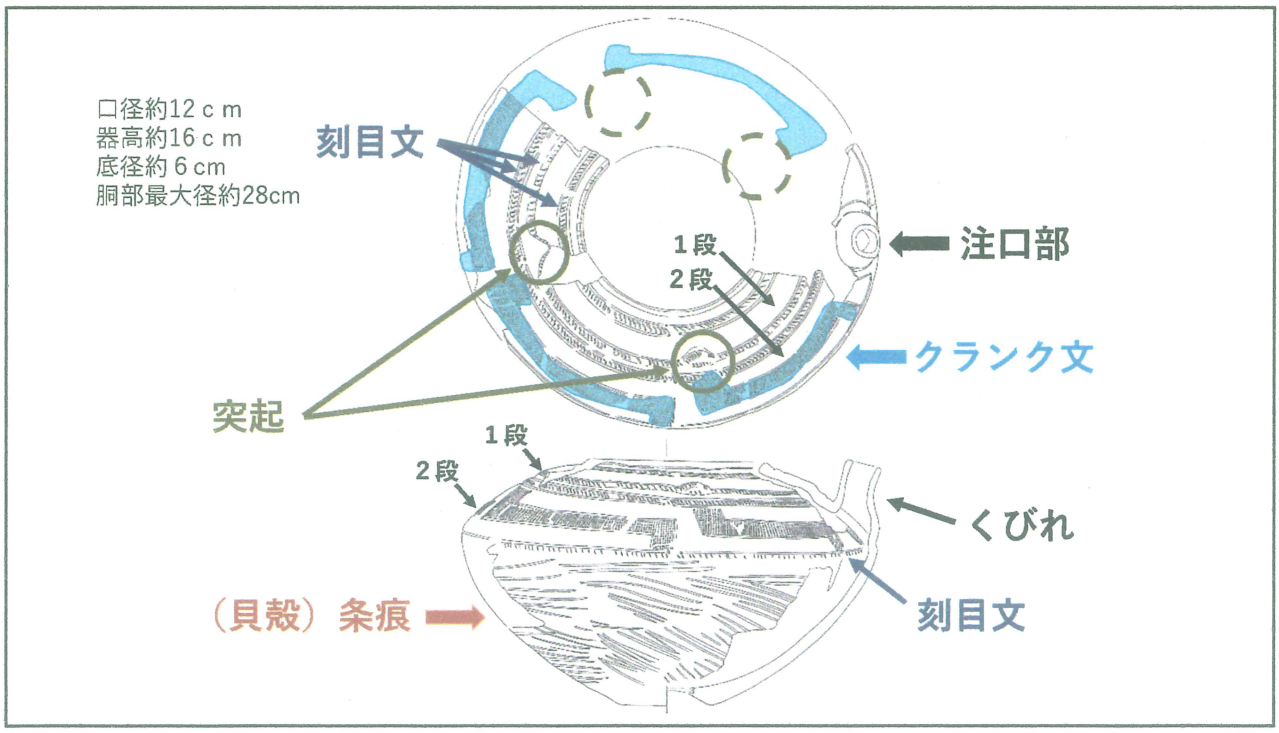
井野長割遺跡と注口土器の時期



井野長割遺跡航空写真
（平成30年：北東から）

井野長割遺跡航空写真
（昭和50年：南から）


第２次調査
（その１）
昭和48年４月
M５
第２次調査
（その２）
昭和49年12月
~50年２月
昭和48～50年調査地点
現況地形図に遺跡の地形を合成
谷
捨て場
大型土坑
道
貝塚
墓
貯蔵穴
盛土
広場
住居
捨て場
井野長割ムラのかたち
縄文時代の遺跡の様子を模式化


口径約12ｃｍ
器高約16ｃｍ
底径約６cm
胴部最大径約28cm
刻目文
注口部
１段
２段
クランク文
突起
１段
２段
くびれ
（貝殻）条痕
刻目文

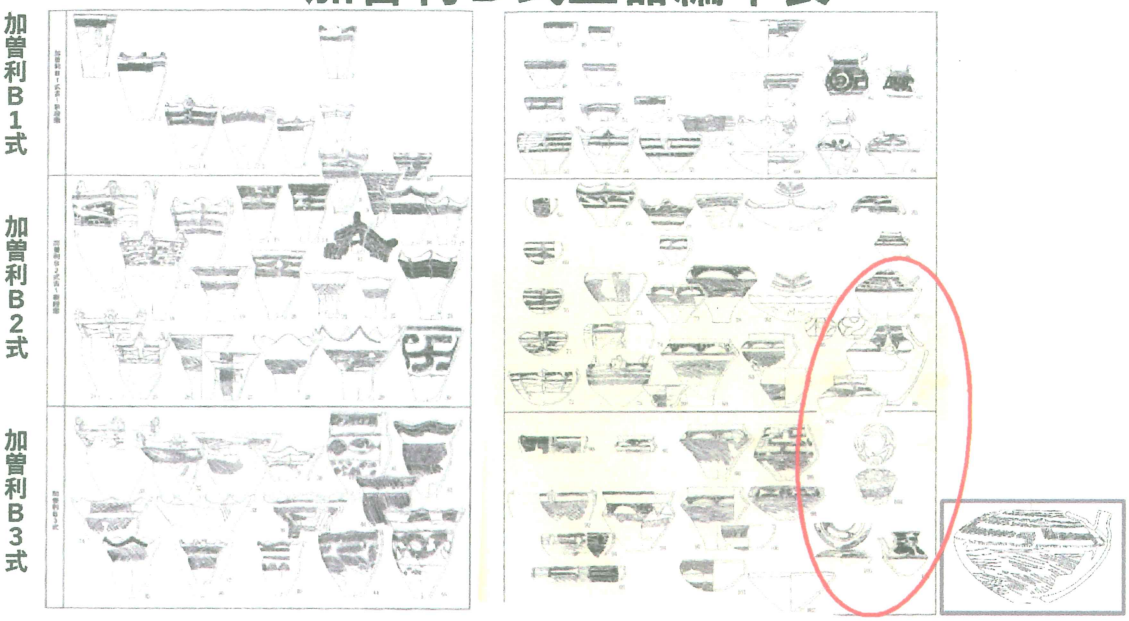
カワアイガイ
（井野長割遺跡
第５次調査貝塚
出土

縄文土器編年表（一部）

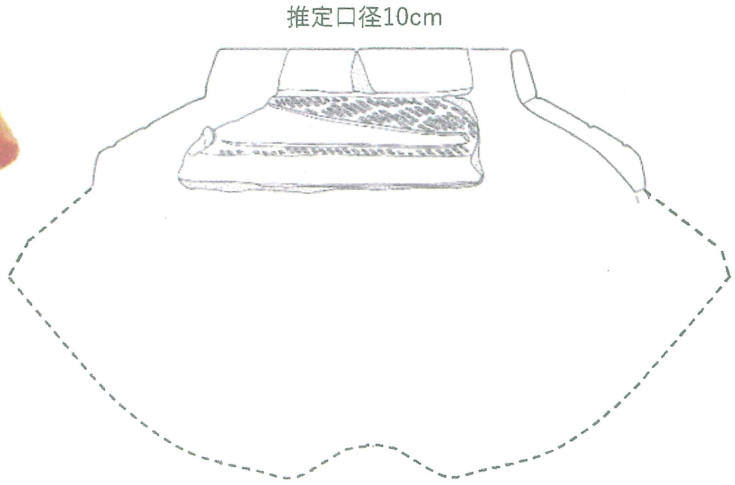
	瀬戸内東部	近畿	東海	南関東	東北北部	従来の年代観	西暦
中期	（里木Ⅱ）	＊北白川下層C4	＊山の神	＊加曽利E4	＊大木10a	縄文時代 中期	2500
後期	中津 ＊福田K2 布勢 津雲A ＊彦崎K1 岡崎K2	中津 ＊福田K2 四つ池 北白川上層1 北白川上層2 北白川上層3 一乗寺K	林の蜂Ⅱ 林の蜂Ⅲ 咲町Ⅱ 林の蜂Ⅳ 八王子 西北出	＊称名寺1 ＊称名寺2 ＊堀之内1 ＊堀之内1 ＊加曽利B1 ＊加曽利B2	＊沖附 ＊宮戸1b ＊十腰内1 ＊十腰内2		2000
	元住吉山Ⅰ 元住吉山Ⅱ 福田K3	＊元住吉山Ⅰ 元住吉山Ⅱ 宮滝 滋賀里Ⅰ	城塚K2 （三田C） 伊川津Ⅰ ＊清水天王山下層	＊加曽利B3 ＊曽谷 ＊安行Ⅰ 安行Ⅱ	＊十腰内3 ＊十腰内4 ＊十腰内5 ＊（鳥追）	後期	1500
晩期	＊黒土B2 ＊雲浦手B2 ＊前池	＊滋賀里Ⅱ ＊滋賀里Ⅲa ＊滋賀里Ⅲb	清水天王山中層 ＊元刈谷 稲荷山・桃井 西之山 東海東C	＊安行Ⅲa ＊安行Ⅲb ＊安行Ⅲc ＊安行Ⅲd	＊大洞B1 ＊大洞B2 ＊大洞BC ＊大洞C1 ＊大洞C2 ＊大洞A1	晩期	1000

「弥生農耕の起源と東アジア」『ニューズレター』７号
国立歴史民俗博物館，2007年

加曽利Ｂ式土器編年表



秋田かな子「加曽利Ｂ式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション，2008年



宮内井戸作遺跡（佐倉市）

国史跡井野長割遺跡　指定15周年記念講演会

『注口土器が語る井野長割遺跡の交流』　2021/1/16

「製作復元により受けとめられた注口土器の造形と使用想定」

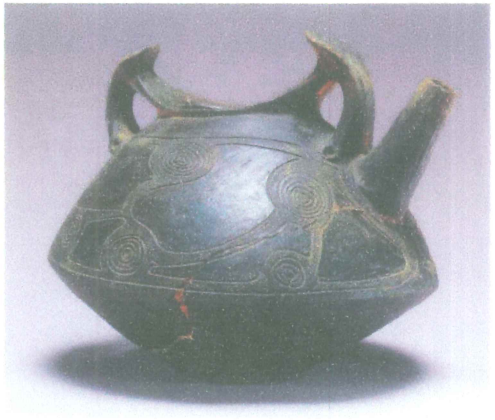
千葉市埋蔵文化財調査センター　縄文土器製作技術研究

戸村　正己

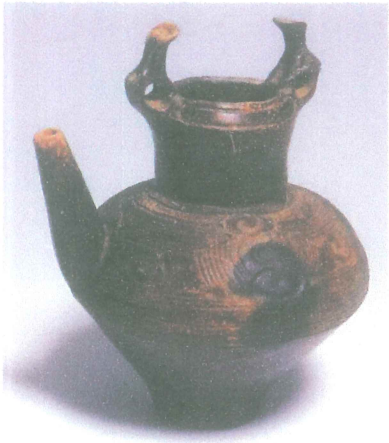
第１図 注口土器の造形 -さまざま -

山梨県　中谷遺跡

青森県　十和田



埼玉県　中三谷遺跡

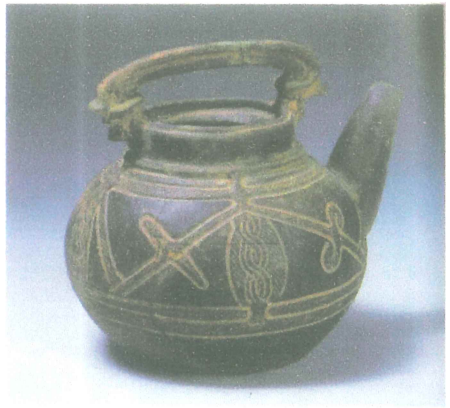


群馬県　今井東平遺跡

宮城県　宝ヶ峰遺跡

群馬県　大根新新屋敷前遺跡

埼玉県　雅楽谷遺跡

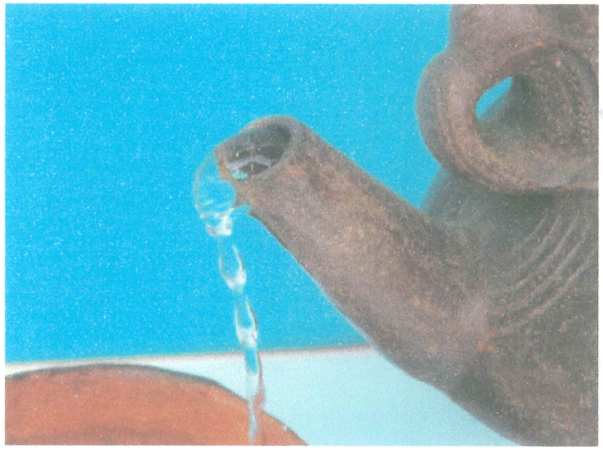


東京都　改戸遺跡

第６図 「注口土器（製作復元）」による“注ぎ”の検証

茨木県福田貝塚出土土器モデル製作

①「最大容量」における注ぎ始め



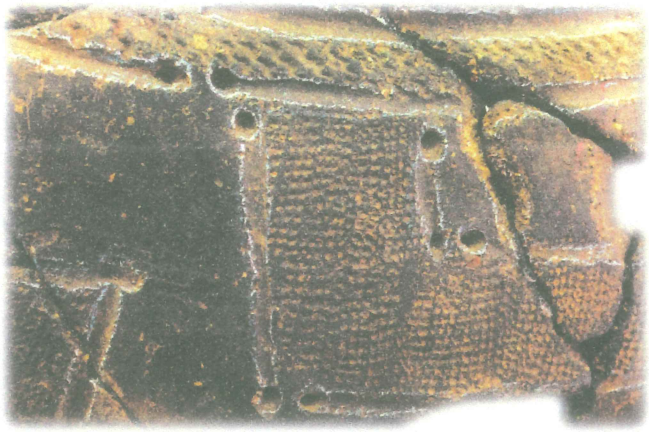
注ぎ開始段階の状態

③ 更なる注ぎの継続（安定した注ぎの出現）

※復元土器を使用

2021.01.16(土)
井野長割遺跡国史跡指定15周年記念講演会

注口土器が動く理由（わけ）



東海大学 文学部 歴史学科 考古学専攻 秋田かな子

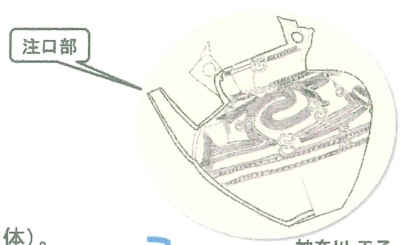
1. 注口土器とはどんな土器？

- 注口土器という“器種”
  - 液体を注ぐための装置（=注口部）を備えている。
  - 基本的に火には掛けず、中身を加熱しない容器。
  - “器種”に占める個体数がごく少ない（縄文土器は深鉢主体）。
  - 注口土器固有の文様をもつ場合が多い。
  - 少数ながら他地域への移出/移入がみられる。
  - 移出先で形態や文様が模倣され、似て非なる変容を生じる。

⬇

非日常的な場面で使用された特別な“器種”。

➢ 中身も特別な液体（果実酒）か？



神奈川 王子ノ台

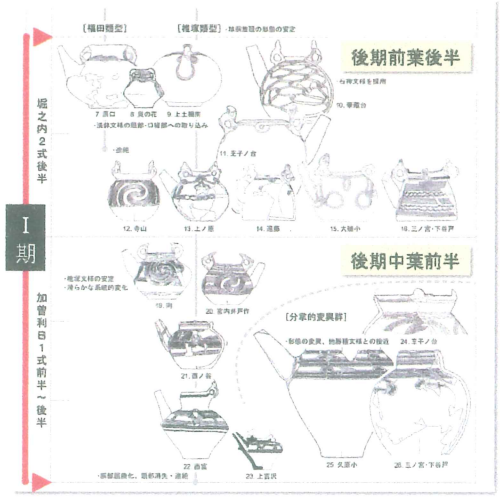
特殊性を示唆

井野長割

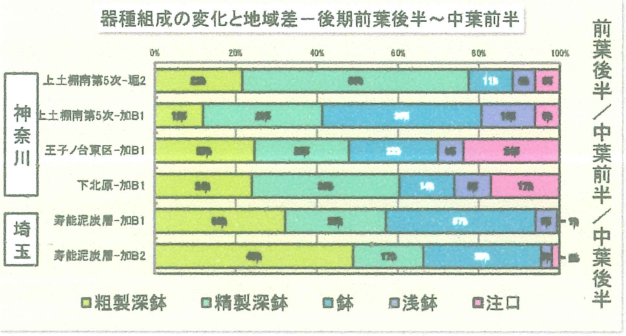
2. 関東地方にみる変遷史と画期①

▲が画期を示す。▲と▲の間をⅠ～Ⅲ期と呼ぶ。

- 変遷史の概略
  - 中期後葉頃から変遷が追え、いくつかの系統に分かれたり、まとまったり、途絶えたりする。
  - 特別な性格を強く帯び、地方を超えた展開をみせるのは後期前葉後半以降。
  - 変遷史にはいくつかの画期がみられる。
    - ➢ Ⅰ～Ⅲ期に分けることができる。
- Ⅰ期の様相と特徴
  - 神奈川県域（特に西部）は製作の中心地域。
    →次ページ
  - 中距離・遠隔距離の地域に移出→波及力は高い。
  - 直接移入や模倣・変容したかたちで少数出土。
  - 様相・変遷は統一観をみせる。
  - 唐突に途絶える。



3. Ⅰ期の地域的偏在性と変化の確認



- 製作の地域的な偏在性
  - 神奈川/埼玉比較。南関東地方でも組成率が大きく異なる。
  - 千葉県域も埼玉県域と同様に積極的に製作していない。
  - 移出先の地域は自分たちの注口土器をもたない。→模倣・変容

- 模倣されるということは
  - その価値を認めている。
- 注口土器自体の価値？
  - 交易品としての価値なのか？
  - 使用方法や意味（意義）に重点。
  - 非日常的な儀礼的な場面で、しかるべく用いられることによる効果に価値を認めている。

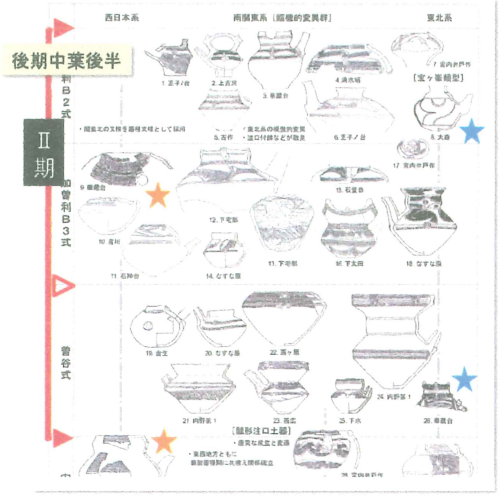
⬇

それらを背負って広域に動く

注口土器交流システムの確立

異なる地域・系統の人々が行き来し、その間でさまざまなモノゴトのやりとりが行われること（goo国語辞書を改編）。

4. 関東地方にみる変遷史と画期② ★近畿系移入品 ★東北系移入品



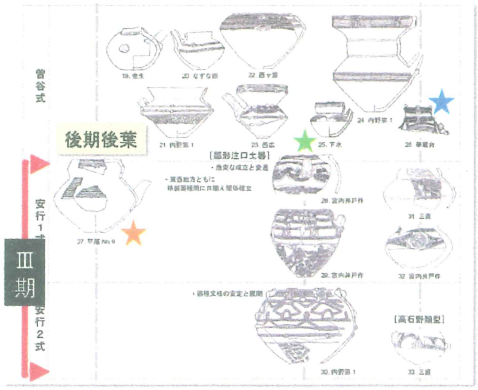
- Ⅱ期の様相と特徴
  - Ⅰ期の中心地で製作が途絶え、数量激減。
  - 前半に東北地方から、後半には近畿地方から少数の移入品が加わる。
  - 関東地方独自の注口土器はなく、上記の模倣的変容品と、既存の別器種に注口部を取り付けた土器が代替する。
  - Ⅰ期にみられた統一性はない。必要に応じてその都度製作されたような様相を示し、系統は不連続。

製作の中心地域が関東地方以外に移る
移出・入関係が切り換わる

⬇

交流システムの地方を換えた継承

5. 関東地方にみる変遷史と画期③ ★近畿系移入品 ★東北系移入品 ★関東系



晩　期

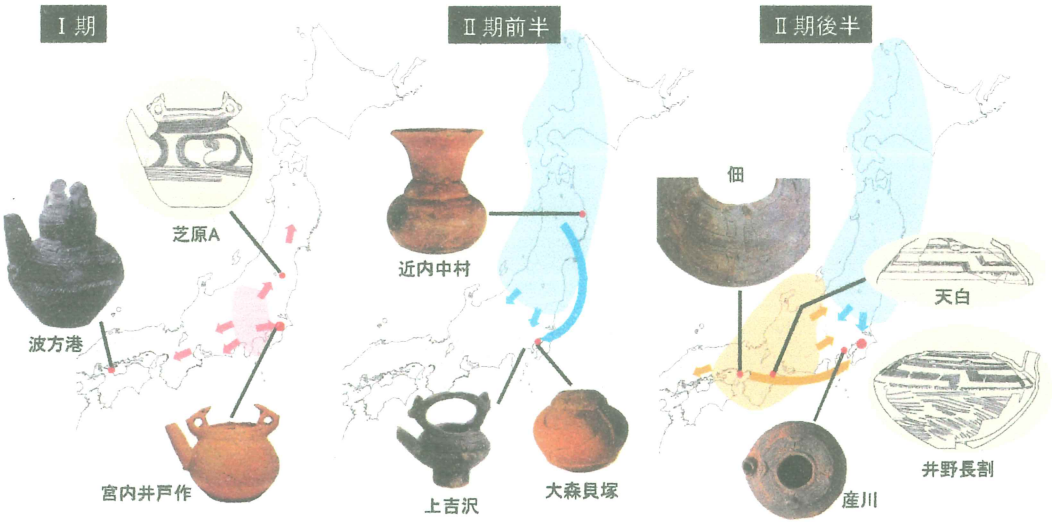
- Ⅲ期の様相と特徴
  - 関東東部～北部に独自の注口土器が成立。
  - 千葉県域などの拠点的集落で出土率高。
  - 東北・近畿地方からの移入品の存在は継続。
  - 特に東北系の模倣的変容品など、変異が顕著。
  - 東北系の根強い浸透力・影響力を示す。
  - 一方で近畿系の波及力も高い。→関東西部

⬇

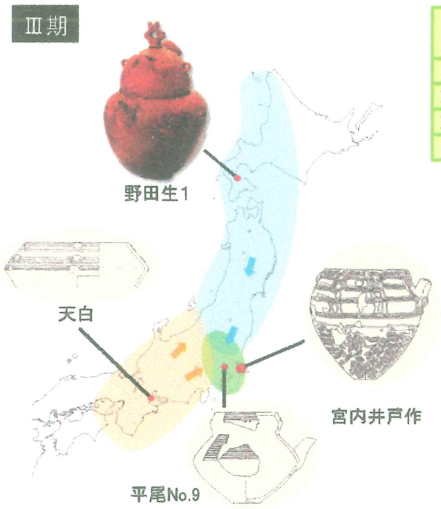
各地方で独自の注口土器製作が定着
それぞれの注口土器を用いた儀礼の活発化

交流システムが各地方で定着・安定運用

6. 注口土器の動き―各期の概念図①



7. 注口土器の動き―各期の概念図②



独自の注口土器製作状況

	近畿	中部	関東							東北
			神奈川	東京	千葉	埼玉	群馬	栃木	茨城	
Ⅰ期	・	◎	◎	○	・	・	◎	・	・	・
Ⅱ期前半	○	・	○	○	・	・	・	・	・	◎
Ⅱ期後半	◎	○	・	・	○	○	・	・	・	◎
Ⅲ期	◎	◎	・	○	◎	◎	○	◎	◎	◎

● 注口土器交流システムの別側面

- 活発な注口土器交流の結果、地域的系統が一体化しないのは何故だろう？→4枚の地図
- そもそも“交流”という語には「異なる地域・系統の人々の交わり」という意味があった。
- 注口土器交流システムには、自分たちと他所の人々の違いを再確認する目的も含まれていたのでは？
- 間を取り結ぶとともに、自/他の間合いを維持する。

8. 結 論―注口土器が動く理由―

注いだり
注がれたり
酌み交わす

● 注口土器交流システムの理解

- 注口土器は第一義的には特別な液体（飲み物）を注ぐための器種である。
- 器種組成に占める率の少なさから、非日常的な儀礼の場面で用いられたと考えられる。
- その場面とは、中距離～遠隔距離の各地に移出されていることから、それら出向先の地域の人々との交流を図る（友好関係を結ぶ）ための儀礼的場面であったと想像される。
- 注口土器は、異なる地域・地方間の人々の間を取り結ぶ社会的機能を担った土器とみることができ、同時に異なる人々間の関係性を確認・維持する社会的機能も果たしていたと言えよう。
- この社会的機能の意義が出向先各地で認められ、価値のあるコトとして受容・共有された結果、その価値観が模倣・変容というかたちで表現されたのだろう。
- そして、こうした意義の共有が、各地域に独自の注口土器の製作を促したと考えられるのである。
- 注口土器が動く理由は、飲み物を酌み交わすという儀礼的行為を伴う場面を通じて、広域交流を促進する道具であったことに求められる訳である。

井野長割の注口土器は、そうした状況を示す好例

※留意点　注口土器を用いる儀礼は重層的。
地域内部の儀礼でも用いられていたと考えるべき。